



Title	文字からみた手話
Author(s)	米川, 明彦
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1980, 13, p. 5-19
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47794">https://hdl.handle.net/11094/47794</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

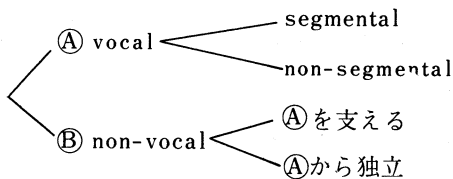
The University of Osaka

# 文字からみた手話

米 川 明 彦

## 1. 手話研究の役割

手話は非言語的コミュニケーションと言われている。広井脩氏は非言語的コミュニケーションを「送り手によって意識的あるいは無意識的に生成され、受け手に特定の意味反応を喚起する記号として機能する言語以外の行動要素 behavioral component の伝達」と定義し、<sup>1)</sup>「言語的 verbal」は「音声的 vocal」と同義に用いられている。



コミュニケーション過程に關与する記号を上図に分類するならば、手話は(B)であり、(A)から独立している記号である。こういう位置にある手話を研究する意義について次に述べてみる。

①F. C. パン氏他は、従来の言語学と違い、手話の研究が人間の言語と言語能力の本質を知るための新しい材料としての役割を果すと言っている。<sup>2)</sup>

②またパン氏他は、手話の研究が音声言語についての研究において発展してきた理論の良否を決める新しいデータとしての役割を果すことをあげている。

③以上の2点は学問における役割であるが、次は聾教育における問題である。岩淵紀雄氏は次のように述べている。<sup>3)</sup>「あるろう学校の校長先生の話によると、わが国のろう学校卒業生で年相応に文章の読み書きや意味が理解出来る人は、全体の5%にも満たない。多少の不自由はあっても会話が困らない程度に出来る人になると、さらに少なくなってわずかに1%かそれ以下であろうという。また、ある報告によれば、ろう学校高等部まで12年間も学んでも、その人たちの平均学力は普通の小学校4・5年程度のレベルに止まっているとのことである。」「ろう学校に学んで成績の上がらなかった大多数の人たちのケースを調べてみると、読唇が上達しなかったか、他のことが学べぬほど発語に時間がかかりすぎたと思われる点が少なくない。それだけ口話法教育には問題があり、別の報告を見ると、言語取得能力に欠陥があると、人間的・心理的問題を引き起しているばかりでなく、社会的損失を与えていると警告している。こうした現実を見聞するにつけても、現在のろう学校教育のあり方には問題があり、その中でも口話法教育に重点をおいた指導方法は、早急に改めなくてはならぬと提案したい。」

このような問題のある口話法教育にかわるものとして現在のところ最上のものにトータル・コミュニケーションをあげることができる。トータル・コミュニケーションとは「聾者とあるいは聾者間の効果的なコミュニケーションを保障することを第一義とし、そのために必要適切なくつかの手段を併用するという考え方あるいは理念」<sup>4)</sup>であり、聴能・口話・手話・指文字等の各方法の長短を相補って実践するものである。

アメリカでは88.4%の聾学校・難聴学級・重複障害学級等で採用されている。しかし日本においてこの方法を採用しているのは1校のみである。これからの日本の聾教育はこの方法を採用する可能性がおおいにある。そのために、手話を研究することは重要なのである。

④10年ほど前までは、手話は聾啞者だけのものであって、健聴者との伝達手段としては考えてもいなかった。しかし現在、聾啞者の社会的参加は積極的になり、普通校との統合教育もおこなわれてきている状況で、両者は以前と比べものにならないほど接近してきている。そこで両者の関係をつなぐ手話がクローズアップされてきた。この手話は、述べたように、本来、聾啞者の日常生活の用を足す道具であったもので、政治・経済・社会・学問に関する用語はほとんどなかった。したがって手話による伝達に限界があり無理がある。これを克服するために手話の増補・修正が必要となる。これまでの模写的・暗示的手話だけではこなせない用語が多くあるため伝達が円滑にいかなかった。それを円滑にするためには手話の記号性を高める必要がある。そのことは手話の構造を分析することから出発しなければならないことを意味する。

## 2. 漢字からみた手話

拙論のねらいは、日本の文字体系と表記態度が手話に及ぼしている影響を、アメリカの文字体系・表記態度が手話に及ぼす影響と比較しながら述べ、そこに問題点を見出し、かつ手話の増補・修正のための方法を提案することにある。先の④に相当するものである。

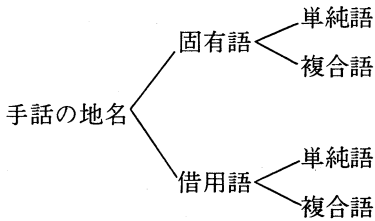
### 2-1 手話の地名にみる漢字利用

F. C. パン氏とデビー・クラウス氏は日本の手話の地名を分類している。<sup>5)</sup> これによると6つに分類されているが、十分なものとはいえない。たとえば次のような同音の言いかえの手話の地名は<sup>6)</sup> 6分類には当てはまらない。

原宿=腹+宿    秋葉原=秋+腹    蒲田=鎌+田    目蒲=目+鎌  
代々木=四+四+木    多摩=玉

ここでは地名の分類が目的ではないので、パン氏の分類・用語とは別に、

下記のように分類しておきたい。



「固有語」というのは日本語に全く影響を受けずに独自につくりだした手話、「借用語」というのは日本語からの借用に際し、漢字の影響を受けた手話である。手話は日本語から独立した言語であるから、固有語に見られるように、「山形」はさくらんぼで表し、「奈良」は大仏で表すのが本来であろう。しかし「福島」の「幸福十島」のように日本語の漢字に基づいた語構成の手話、つまり借用語となっていることがここで問題にされるのである。次に例をあげる。

#### 単純語の例

群馬＝馬（両手人差指を上下に動かす。「ウマ」の意の手話。）

栃木＝栃の葉（右人差指を左手五指にそって動かす。）

千葉＝千（左の人差指と中指、右人差指で漢字「千」をかたどる。）

東京＝東（両手人差指と親指でLJをつくり上へ動かす。「ヒガシ」の意の手話。）

兵庫＝兵（両手のこぶしを右脇につける。鉄砲をもつ動作で「兵隊」を表す。）

#### 複合語の例（以下説明を簡略にする）

青森＝青い＋森

宮城＝宮＋城（「城」はしゃちほこを人差指で作る。）

石川＝石＋川

三重＝三十重い

鳥取＝鳥（親指と人差指で口ばしを作る。）＋取る

山口＝山＋口

長崎＝長い＋崎

鹿児島＝鹿（三指で鹿の角を作る。）＋島

以上見たように、単純語も複合語も地名の漢字の訓（意味）をとって手話表現している。もし地名が仮名・アルファベットで表記されているならば決して上のような手話は生まれなかったであろう。外国の地名が先の分類で借用語ではなく、固有語に属していることから推察できる。たとえば、

アメリカ＝星条旗

オランダ＝風車

スペイン＝闘牛のしぐさ

ブラジル＝コーヒー＋国

のように、地名から連想されるものをもって手話表現をしている。

筆者が聾学校高校部を卒業した数人の聾啞者に、「ペキン・ナンキン・シャンハイ・シーアン・ソウル」をそれぞれ手話で表わすように要請したところ、それができずに指文字（指で音節を文字化したもの）で表わした。そこで次に「北京・南京・上海・西安・京城」を示したところ、以下のように手話表現をした。

北京＝北＋京都      南京＝南＋京都      上海＝上＋海

西安＝西＋安心      京城＝京都＋城

「ペキン」では表わせなかったものが、「北京」では可能となる。これは漢字という表意文字で表記されているためである。ある日本語に対応する手話は漢字を媒介にして生まれる。このことは地名に限ったことではなく、一般名詞にも言える。

## 2-2 手話の漢字字形模写

鈴木修次氏は「文字から新しいことばが生まれることもあるという先述のはなしは、文字という文明が、その文明に即して新たな文化を生んでゆくのだ」と言っている。<sup>7)</sup> これは漢字という文字が手話ということばを生み出して行くことにもあてはまる、また漢字のきわめて視覚的な性格はその字形を模写した手話を生んでいる。たとえば次のようである。

田＝両手の3指をます目にくむ。

井＝両手の2指をます目にくむ。

川＝3指を上から下へ動かす。

中＝左人差指と中指の指頭をあわせ、その上に右人差指をのせる。

小＝左人差指と中指をたて、その間に右人差指をいれる。

北＝両手人差指と中指で「丿」を描く。

兆＝「北」に同じ。

人＝両手人差指で人をかたどる。

問＝両手人差指と親指で輪をつくり、「冂」を描く。

同＝「問」に同じ。

司＝「問」の右手のみ、「冂」を空書する。

億＝イを空書する。

庁＝丁を両手の人差指でかたどる。

厚＝厂を両手の人差指でかたどる。

刑＝刑を両手の二指でかたどる。

公＝ハをかたどり、ムを空書する。

会＝両手でへをかたどる。

杉＝左人差指を立て、その横に右3指で彡を描く。

参＝彡を描く。

日＝両手の人差指と指指でそれぞれ□□を作り組みあわせる。

入＝両手人差指で入をかたどる。

井＝「井」に同じ。

非＝両手3指で三三を描く。

災＝3指で<<<<を描く。

巢＝「災」に同じ。

千＝左2指と右人差指で千をかたどる。

王＝左3指と右人差指で王をかたどる。

町＝左3指を右に向け、その横で右人差指で丁を空書する。

局＝左人差指を立て、右人差指で可を空書する。

このように約30例が字形に基づいて作られている。また「予」は手話では象の鼻で表わす。これは

予→豫→象

という旧字体に基づくものである。漢字の手話に与える影響は非常に大きく無視できないものとなっている。

鈴木孝夫氏は日本語の表記としての漢字を論じて次のように述べている。<sup>8)</sup>「私の主張はほぼつぎの二点に集約することができる。第一は、日本語表記としての漢字は、主としてその音訓二重性の故に、原理的には表音表記であるヨーロッパ諸国などでは想像もできないような、本質的な影響を日本語という言語に与えている事実である。第二は、日本語の中に用いられている漢字は、音声を表わす代理記号としての文字表記であるよりは、むしろそれ自体がきわめて視覚的な性格を持つ独立した伝達媒体となっており、音声と併立し、これと密接な相補関係に立っていることを明らかにすることである。」この主張は日本語における漢字のはたす役割がいかに大きいものであるかを適切に述べているが、筆者もまた、手話において漢字がいかに大きい影響を及ぼしているかを主張するものである。



### 2-3 手話の増補

国立国語研究所でおこなわれた現代新聞の漢字使用に関する調査の内容の紹介が野村雅昭氏によってなされている。<sup>9</sup> その中で、漢字の用法のうち、数詞・略語・借字・特殊訓・人名・地名を除いたものを「一般」用法と呼び、それに属するものをその語構成上の機能によって分類している。結果は全体として音として用いられる傾向が圧倒的に強いことが明らかとなっている。そして音では「結合」用法に属するものがきわめて多く、ついで「接辞的（後部分）」に用いられるものがやや多い。

このように漢字が多く字音語として用いられている現在、手話はそれに対応するものを造語・増補しなければならない。その際に漢字カバー率<sup>10</sup>を考えると便利である。それはある単語の集合を表記するのに使われている漢字が、それぞれどれだけの種類・量の単語を表記しているかを示す尺度である。

漢語を構成する漢字に相当する手話を作成するにあたり、漢字カバー率の高い漢字から選ぶのがよいと思う。樺島忠夫氏は外国人留学生のための基本語彙表を作成する目的から、高等学校教科書『倫理・社会』『政治・経済』『高等地理』などを対象にして語彙調査をした。そして、ここにあげた三教科について選んだ基礎語彙について、ここに含まれる漢語を範囲として、漢字の音カバー率を調べた。<sup>11</sup> 漢語総数 536 語、これを構成する漢字数は 496 字である。カバー度数（その漢字を含む異なり語数。カバー度数 1 はカバー率で 1.87 パーセント）が 5 以上の漢字を、度数が大きいものからあげられている。

的 国 地 制 権 業 大 人 化 力 者 自 民 農 主 政  
 性 立 理 法 中 代 感 学 会 生 後 産 定 実 家 一  
 利 物 所 差 金 資 対 発 部 面 派 教 現 間 要 綿

## 牧 度 体 世 事 公 関 意 小 悪

これらは造語力の大きい漢字である。これらに相当する手話を持つことは非常に有益である。

このようにして、高等学校の教科書から基礎語彙を選び出し、それに含まれる漢語を構成する漢字に相当する手話を作成することを提案する。

一つの漢字に一つの手話をあてはめておこなうならば、類義語の区別に役立つことになる。たとえば、『分類語彙表』の1,3001を見ると「感慨・感動・感心・感銘・感激・感応」などその他多くがあがっているが、感・慨・動・心・銘・激・応にあたる手話があるならば、これらは簡単に区別できる。

筆者が以前、ある聾学校高等部三年生の作文を調査したとき、次の例を見出した。

私たちは感想でした。

遠い道という感想のあるみぶり劇でした。

展示は感想はなかったのでもく作ったと思われる。

時間が長いので見て、他の人は感情をしている。

感心になったら国連ポスターのなつかしや反省のために自分から注意する。

上の例は「感想・感情・感激・気持ち」などを混同している結果である。このようなことをなくすためにも1漢字1手話をとりにいれることを提案する。

#### 2-4 漢字の将来と手話

鈴木孝夫氏が「私たち日本人がある漢字の訓と音を知っているということは、とりもなおさずその漢字で示される概念の、二つの別の言語における音的実現体が、同一の文字表記をつなぎとして頭の中で癒着しているこ

とにほかならない」と述べている。<sup>12)</sup> これはそのまま手話にも言えること  
 からである。「新しい」を意味する手話をA（手甲を前に向けた両手をつ  
 ぼめ、パッとひらく）とすると、〈交換+A〉という語構成の中では「革  
 新」を、〈回復+A〉は「更新」を、〈A+車〉は「新幹線」を意味する。  
 これらの手話は日本語「革新・更新・新幹線」を基にして作られたのであ  
 るから、当然、Aはシンとよまれるべきである。別の言い方をすれば、漢  
 字の「新」が音でシン、訓でアタラシイであることを前提として、シンと  
 アタラシイという「音の実現体」が、同一手話Aをつなぎとして頭の中で  
 結びあわされているのである。

ところで、安本美典氏<sup>13)</sup> や野村雅昭氏<sup>14)</sup> は、漢字がそう遠くない将来  
 になくなるであろうと予言をしている。この予言が的中した場合、手話の  
 受ける打撃は非常に大きなものになるであろう。手話が漢字を媒介にして  
 作られていることを思えば容易に察せられる。

### 3. 仮名からみた手話

#### 3-1 指文字

指文字という表音記号がある。日本の指文字はアイウエオからンまでの  
 46字、アメリカの指文字 (manual alphabet) 26字がある。また指文字と  
 は言えないが、表音の身振りが祇園花街にある。井之口有一氏によると、<sup>15)</sup>  
 「身振りによって舞子・芸子どうしが意思を伝え合うこともある。そのよ  
 うな身振り語には、いろは四十八文字（四十五音）それぞれを表示する図  
 14のような記号がある」と述べている。

ここで扱うのは前二者である。現在の日本の指文字は音声語を写すのに  
 用いられたり、手話にないために代用されたりするもので、積極的なとり  
 いれ方がなされていない。単なる補助的手段だと言える。

これに対して、アメリカの指文字はきわめて積極的なとりいれがなされている。その使用法は、ある語の頭文字を指文字によって表わし、それを何らかの動作を伴ってその語を表示するものである。これは大変便利で、類義語との区別にも有益である。“TALK TO THE DEAF”<sup>(16)</sup> に次のように書いてある。

The use of “initial” signs is a great help in being specific. Such signs are made by beginning the sign with the first letter of desired word. For example, the sign for “think” is made by revolving the index finger before the forehead. This can also mean “meditated” or other related synonyms. However, when this motion is made using an “r” instead of the index finger, it stands for the specific noun “reason” and has no synonym. Signs acquire specific meaning only when they are “initial” signs or when they are associated with other signs or spelled words.

頭文字の指文字利用は地名・色名・親属語・曜日・方角など多くあり、“TALK TO THE DEAF”の所載の約千語のうち1割強を占めている。地名の例を次にあげておく。

BALTIMORE = 指文字Bを前方へ。

CHICAGO = Cを波状に下方へ。

ITALY = Iを額で十字に切る。

NEW YORK = 左掌に右Yをのせて右方へ。

WASHINGTON = Wを前方へ。

このような日本とアメリカの指文字の使用の違いがどこからくるのかを次に考えることにする。

### 3-2 文字の表記体系と表記態度

日本はバイリテラル（複数文字体系使用）の言語社会である。漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字など複数の文字を使用し、表意的に書き表わそうとする傾向が強い。このことは、語の種類別の文字の種類別によって書き分けようとするところからわかる。たとえば、漢字は名詞・動詞・形容詞などの概念表示部分に用い、ひらがなは形式名詞・活用語尾・助動詞・助詞などに用い、カタカナは動植物名・擬声語・外国語音・外国固有名詞などに用い、ローマ字は略語などに用いられる。

一方、英語の表記体系は簡単で、表音単音文字のアルファベットを使っているだけである。イエスベルセンやブルームフィールドが述べているように、ヨーロッパの言語では、要するに文字はそのままではすぐに消えてしまう人間の音声を便宜的に書きとめる一つ的手段にすぎないのである。

上述の日本語社会と英語社会における表記体系・表記態度の違いが、それぞれの手話に影響を及ぼしていると考えられる。すなわち、日本の手話の場合、狭義の手話と指文字とのあいだには使い分けが見られ、全体的に表意的態度が顕著であるのに対し、アメリカの手話の場合、頭文字の指文字による表示は表音的態度が見られる。これらのことを略語を例にとって考えることにする。

日教組＝日本教職員組合

全学連＝全日本学生自治会総連合

総評＝日本労働組合総評議会

映論＝映画倫理規定管理委員会

NAACD＝全米有色人地位向上協会

PUSH＝人間性を守る人びとの連合

NICS＝新工業国群

JETRO＝日本貿易振興会

略語（短絡語）においては、アルファベットの頭文字を短絡させるより

も、漢字を短絡させたほうがわかりやすい。漢字の表意性を十分に生かした方法がとられた結果、表音性のアルファベットよりも視覚的にすぐ見当がつく。日本語は漢字と仮名をもっているが、仮名による略語、すなわち表音記号による略語を採用せずに、表音性の漢字の略語を採用したのである。一方、英語には表音文字のアルファベットしかないため、アルファベットによる頭文字の略語しか生み出せなかった。これらのことがそのままそれぞれの手話に反映して、日本の手話においては指文字（表音記号）を積極的にとり入れることがなく、アメリカの手話においては積極的にとり入れられたのであった。

### 3-3 指文字利用による手話の増補

以上のことをもう一度くりかえして言うと、日本の文字の表記体系・表記態度が手話に反映して、日本の手話は表意的である。一方、アメリカの場合は表音的なものがそのまま手話に反映している。しかし、日本のこの表意的なものがかえって手話にマイナスになっている。手話の中に指文字がアメリカのように積極的にとりいれられていない。このことのために、今までの日本の手話は語彙量が小さく、模写的であり、類義語との区別をつけることができなかった。

そこで、手話を増補するにあたり、考えなければならないことは、手話の構成要素である。これに関してはアメリラン (American Sign Language) の研究で Stokoe (1960)<sup>17)</sup> と Battison (1973)<sup>18)</sup> が4つのパラメーターをあげている。①手指の形態②手指の位置③手指の運動④手指の向きがそれである。指文字を利用した手話を作るということは、①の手指の形態が指文字46字のどれかをとり、残りの3つのパラメーターが何らかの位置・運動・向きをとればよいのである。

アメリカの指文字利用の手話の例を“TALK TO THE DEAF”から

あげてみる。指文字Cの利用例。

COUSIN = Cをほおにあて振る。

CHARACTER = Cを胸のあたりで円を描く。

CHURCH = 左甲の上に右Cをのせる。

COMMANDMENTS = 左掌に右Cをあて下へ。

CHRISTMAS = Cで狐を描く。

CHRIST = 左肩から右腰へCを動かす。

日本の手話にもこのような指文字を頭文字的に利用することを提案する。これによって今まで区別のなかった類義語同志が区別できるようになり、また抽象語も表現可能となる。

栃木県立聾学校・栃木県ろうあ協会が出している『手指法辞典』は一部この方法が採用されている。たとえば、今までの手話では、「係」「当番」「役員」は同じ手話であったが、この辞典では「係」は指文字カを、「当番」は指文字トを、「役員」は指文字ヤを左上腕にあて右へ引くことによって区別している。

#### 4. おわりに

これまでは、文字論から手話をとりあげた者もいなかったし、文字論を手話からとりあげた者もなかったようである。だとすれば拙論はこの種のはじめての試論であろう。

手話という非音声語に焦点をあてた研究は、今までの言語研究の成果に新しい事実と理論を提供するであろうと思われる。

#### 注

- (1) 広井脩「非言語的コミュニケーション研究におけるいくつかのトピックスについて」『東京大学新聞研究所紀要第24号』1976, p. 76.

- (2) F. C. パン, デビー・クラウス「手話の地名に関する一考察」F. C. パン, 田上隆司編『手話の諸相』文化評論出版 1978, p. 51。
- (3) 岩淵紀雄『しじみ貝の詩 聴力障害者の体験から』日本放送出版協会1978, p.184, p.189。
- (4) 岩城謙「トータル・コミュニケーションと言語メディア」『トータル・コミュニケーション』創刊号。トータル・コミュニケーション研究会, 1979, p. 67。
- (5) 注(2)に同じ。その分類とは, 1. 独自語 2. 直接借用語 3. 転借用語 4. 混合借用語 5. 独自語の複合 6. 独自語と転借用語の複合である。
- (6) 『手話ハンドブック改訂版1』全東京ろう者連盟手話ハンドブック委員会編, 1978の所載の手話。
- (7) 鈴木修次『漢字 その特質と漢字文明の将来』講談社 1978, p. 13。
- (8) 鈴木孝夫『閉された言語・日本語の世界』新潮社 1975, p. 51。
- (9) 野村雅昭「新聞の文章につかわれた漢字」『言語生活』285号筑摩書房 1975. 6。
- (10) 田中章夫「漢字の重みを測る尺度」『計量国語学』75号1975. 12。
- (11) 樺島忠夫「漢字の造語力」『言語』6巻8号大修館1977. 8。
- (12) 注(8)に同じ, p. 83。
- (13) 安本美典「漢字の将来」『言語生活』137号 1963。
- (14) 野村雅昭「漢字の未来」『言語生活』307号 1977。
- (15) 井之口有一「京都室町・西陣・祇園における言語生活の調査研究Ⅱ」『京都府立大学学術報告「人文」』第20号。
- (16) Lottie Riekehof “TALK TO THE DEAF” 1963 : Gospel Publishing House.
- (17) Stokoe, WM, “Sign Language Structure : An outline of the Visual Communication Systems of the American Deaf”, SIL : o. p. 8. 1960.
- (18) Battison, R. M. “Phonological deletion in American Sign Language,” 1973.

(大学院学生)